



ふるさとの灯

齋藤 嶺也

(北海道)

九階の窓ゆながむる大都会もののけ住めぬ透明の街

大都会どこまでもつづくビルの街四里四方に耕作地なし

雨あがり空港の灯を置き去りに短歌の余韻を連れて離陸す

機上よりふるさとの灯は見えにけり疎らに見ゆるもあたたかき灯よ

戦争の連鎖はつづき人間の滅亡ちかし皇紀二千八百年

ライオンは腹を満たせば狩らぬのに餓鬼道に墮つホモサピエンス

AIを駆使して戦ふ現代戦せめて棒されと石に限れよ

よわよわとてふてふ止まる秋明菊てふと花とのひと世の逢瀬

ヒューンヒューン闇を切り裂きまた聞こゆあれは牡鹿の勝ち誇るこゑ

北国の刈り田に青くひこばえの「どうなるべな」と古老はぼつり

電柱は手と手をつなぎどこまでもどこまでも伝ふ平和の明かり

ゆく秋を愛しみ小さき零余子探る父の好みしころ煮にせむと

レジ袋たのめば店員は目で差しぬひとこともなくレジを抜けたり

雪降れば狐も狩りは少なかる生き延びようぞともに春まで

この秋は山の木の実も不作といふ自由の身とはかくも厳しき

このごろの私

今までの人生で一番楽しい
毎日を送っています。なにせ
仕事はしなくていいし、嫌な
ことは断ればいい。誰も遊ん
でくれなくとも夢見るオキナ
でいい。しかし毎日忙
しく、月火水木金金金です。



枯れ葉を生きる

目黒 成子
(群馬)

このごろの私
私は還暦頃が病のピークで
以後徐々に回復し、この一月
六十二歳になり、歩行等は難
があるけれど前よりは身体が
動き、短歌とギターと英会話
とカウンスリングの修行を喜
びとして暮らしています。

国分寺遺跡の欠片に書いてある「物部子成」もののべのこなり 過去世のわたし

八世紀七重塔が建っていた国分寺の地いまは草地の

七重塔がそびえた上野こうずけの国分寺の僧はどこへ行ったか

修行僧が素早く歩いてゆくような風が吹いている国分寺跡

修行僧としての過去世もあるかしら輪廻転生しているならば

この世界のすべてを愛すべきだけどわたしをいじめる課長は嫌い

「言っていない」と嘘つく課長に「録音があります」と言えば課長フリーズ

同僚が「泣いた」と言った映画観たどこで泣くのか解らなかった

母なる木はなれた葉っぱは枯れるほど軽やかに動く枯れ葉を生きる

風まかせ落ち葉寄ったり離れたり形あるうちは基本ひとり

とらわれず風に乗る葉がひとり見る空の景色をわたしも見よう

枯れ葉たち風に押されてコロコロと坂道のぼる子どものように

バイパスの車のあいだのあちこちで落ち葉クルクルたのしそうだね

風に乗る土の場所まで飛べ枯れ葉アスファルトの上はむなしいでしよう

地に降りて朽ちて自分が無くなってみんなとまざって土に成れる葉